ふるさとわがまちづくり

東広瀬下切自治区

◆広瀬城の城下町として

北に矢作川が流れ、南に山をいただき、小鳥のさえずりが響き渡る、のどかな町が東広瀬下切自治区です。その昔城下町として栄え、今も残る蔵屋敷、大手、城下、神田など城にゆかりの地名に、当時をしのぶことができます。

“天勾践を空しゅうすることなかれ、時に范れい無きにしも非ず”と詠った南朝の忠臣児島高徳が、築いたといわれる広瀬城跡が、矢作川を直下に見下ろす小山の頂上にあります。古文書によれば皇国5年(1344年)築城され、16世紀初頭には、西は梅坪、東は足助あたりまで勢力圏としていたようですが、永禄3年(1560年)に松平元康(後の徳川家康)によって落城したといわれています。現在ではうっそうと茂った木立の中に、広瀬神社と石碑を残すだけですが、今は東海自然歩道のコースになっています。

◆地域の交通の拠点として

昭和初期、この自治区に大きな変化をもたらす二つのことがありました。一つは、昭和2年8月から3年1月にかけて、名鉄三河線・猿投～西中金間が開通したことです。「当時は、駅といっても建物はなく、箱形電車が置いてあり、半分は待合室、半分は駅長室でした」と当時の様子を古老が語ってくれました。昭和40年代、三河広瀬駅は藤岡、小原方面から豊田の町へでかける唯一の交通手段として賑わい、近隣から出る粘土を高浜方面に送る貨車が、長く連なっていく情景も懐かしく思い出されます。

平成に入るころから、利用客の減少で、電車からレールバスになり、16年3月には廃線となりました。

その後、おいでんバス(足助～浄水間、小渡～豊田市間)が開通し、現在は駅舎跡をバス停などに利用できないか検討中です。

二つ目は、矢作川を渡り、東西広瀬を結ぶ広梅橋が、梅村源次郎翁の巨額の寄付と地元の浄財により、昭和5年に完成したことです。ここに出てくる梅村源次郎翁は広梅橋の他にも、梅源バスの経営や病院の開設など、この地域に大きな業績を残した人で、その功績をたたえ、広梅橋のたもとに頌徳碑が立っています。現在、この橋を通って、国道153号線へ接続する道の改修が計画中で、実現すればこの地域の交通網の一層の発展が期待されます。

おいでんバス出発式

◆地域住民の力で、観光資源を活用した町づくりへ

広瀬城跡や三河広瀬駅舎跡、廃線後の線路敷き、酒造蔵跡などの遺跡、矢作川と夏場の築などの観光資源を活用した町づくりを、地元のボランティアグループ:広瀬愛護会が努めています。一方、でんしゃ道創造会議が立ち上がり、名鉄三河線・猿投～西中金間廃線後の活用を豊田市と共働で「夢街道でんしゃ道;サイクリング遊歩道」の実現に向け動き出しています。ここでも、広瀬愛護会が、先頭に立ち各種の取り組みをしています。

広瀬やな

でんしゃ道「三河広瀬駅」
(国指定 登録有形文化財)

東広瀬下切自治区データ

(H20.4現在)

世帯数:74世帯
:62世帯(昭和54年)
組数:8組
面積:0.974K㎡
自治区たより:「東広瀬町下切自治区だより」年12回
回覧:月2回
ちびっ子広場:1箇所
ふれあい広場:1箇所
防犯灯設置箇所:28箇所
小学校:東広瀬小学校区
自治区会館:東広瀬下切公民館

広梅橋と広瀬城跡

広瀬神社と石碑

線路敷きとプラットホーム跡